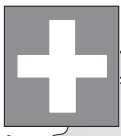


Global View



ダボス会議を活用して
世界の潮流づくりに参加し
日本のプレゼンス向上を



財政再建の経験を踏まえ議論する北欧首脳



基調講演後に会場とのQ&Aセッションで答える英キャメロン首相

今回で10回目の参加となる、スイスで開催の「ダボス会議」に行ってきました。毎年1月下旬の開催です。ダボス会議への参加はスイスの非営利団体である世界経済フォーラムからの招待が基本ですが、経済同友会は、世界経済フォーラムとパートナー関係にあり、その年次総会である「ダボス会議」に積極的に参画してきました。今年のダボス会議には、G8首脳5名をはじめ、100カ国以上から閣僚、経営者、政治家、官僚、学者、ジャーナリストなど約2,500名が参加しました。参加には、年会費など600万円近くの費用が必要で、さらに日本から参加の場合は、渡航費・宿泊費等を含め、年間1千万円もの負担となります(戦略パートナーとされる主要100社は、年間4千万円以上)。このような一見「負担の大きい」ダボス会議に、世界からの参加希望の企業が後を絶ちません。

その理由の一つは、大きなビジネス・チャンスがあるからです。5日間にわたるこの会議は、「世界の潮流を先取りした」主要テーマの下、世界の重要課題を主要分野に分けて、250以上の大小セッションで議論します。世界の各界のトップが集まり、この中で、その一年の世界の潮流やコンセンサスが出来上がると言われていますが、ビジネス・ネットワーキングのみならず、同会議を契機として大規模な商談などにつながることもしばしばあります。戦略的に同会議の場を活用する企業にとってはROI(投資収益率)が非常に高い会議なのです。

そして、もう一つのポイントが世界への情報発信により自国のプレゼンスの向上が見込めることです。主要メディアによる同会議の報道量はG8の数倍と言われ、ここでの発信は、内容次第では世界に大きな影響を与えることができます。従って、各国政府首脳をはじめとする登壇者は、常に世界を意識して発言しています。共通言語は英語ですが、使用言語にかかわらず、スピーチの内容はもとより、いかに聴衆の心をつかむかが重要になります。プログラム等の直前の変更も頻繁で、常に現場での臨機応

変な対応が求められます。周到に準備された筋書きどおりの会議に慣れている日本人にとって、ダボス会議はそれとは「真逆の特異な会議」と言ってよいでしょう。しかし実は世界標準はこうした国際会議の方なのです。

G8ホスト国はこうした場を(サミットに向けたアジェンダ・セッティング等に)戦略的に活用しています。それに対して日本の場合は、こうした「世界標準」を肌で理解していないためか、会議を活用するどころか、逆効果を生んでしまう例もあるように感じます。数年前、日本の某首相が登壇した際、前のセッションのためホールを埋め尽くしていた聴衆の半分近くが席を立ち、出口に向かう長い列を作ったときには、日本への関心の低さに愕然としました。いざスピーチが始まると、某首相は、登壇者の直前の変更に対応していない、コメンテーターである某国前首相の名前が入っていない原稿を読み上げる、途中で原稿を一枚飛ばしてしばし沈黙してしまうなど、褒められたパフォーマンスとは言えませんでした。ほかにも、世界の潮流を論ずる場で、日本の政局を意識して選挙向けの発言をした政治家もいました。首相以下政治的リーダーとその補佐役は、ダボス会議での発言は瞬時に世界に報道されるという認識を持ち、その意味を重く受け止めるべきでしょう。税金を使って出席するのでから、主要先進国の代表としてふさわしい言動と成果を期待します。

日本は、他のG8諸国に倣って、ダボス会議など国際会議に関する常識や認識を改め、参加を増やし、日本のプレゼンス向上に活用すべきです。2011年は米国の約700名参加に対し、日本は約60名(首相一行は除く)でした。

シナリオのない自由闊達な意見交換を行うのは、経済同友会の会議と同様です。今後も本会の幹部が積極的に国際的なフォーラムに参画し、政府や関係者等とも連携しつつ、日本からの発信力をさらに高め、世界の潮流づくりにかわり、日本のプレゼンスの向上に貢献していくことを願っています。



伊藤 清彦
経済同友会 常務理事

Global Viewでは、国際会議等に出席した会員や各国大使経験者、駐日大使等より、世界各国の現状や日本人がビジネスを展開する上での課題、世界の常識・日本の非常識、会議の舞台裏などを不定期にご紹介します。